
flowline flower 1

野沢菜
シエソカ 2003
早川一
日瀬。

書名 flowline flower 1

発行日 2019/05/06

発行 変態美少女ふいろそふい。

印刷 変態美少女ふいろそふい。 出版部

連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

もくじ

土手の魚

送肉

イカロス

私の知らないところで幸せになって。だって貴方に不幸でいてほしい。

表紙デザイン — 野沢菜 / 片桐天音

表紙イラストと「土手の魚」を除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

To the extent possible under law, 野沢菜 and 片桐天音 have waived all copyright and related or neighboring rights to cover image. This work is published from: 日本.
:comet: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/2604.svg> and
:cherry_blossom: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/1f338.svg>
emojis used in cover image are licensed under a CC BY 4.0 by Twitter, Inc and other contributors.

To the extent possible under law, 野沢菜 has waived all copyright and related or neighboring rights to 土手の魚. This work is published from: 日本.

野沢菜 (@burasica)

上手の魚

「我々の根気強い話し合いが身を結び、市民団体様にもご理解頂けまして、そのおかげもありまして、この地にも、我々の総合施設を建てる運びとなったわけでありまして……」

二束三文にもならない土地へ執着する老人たちと、私利私欲を蓄えることしか考えていない私企業の縄張り争いについて、うだつの上がらなさそうなサラリーマンがダラダラと話している。

大学の金で旅行に行き、ついでに老人の戯言について感想文を提出するだけで単位が取れる、そう聞いて取った講義の旅行先が、まさか私の故郷だとは思ひもしなかった。去年の旅行先は温泉地だったらしいのに、今年から変更になったらしい。

同期がサークル活動やらなんやらでバラ色の学園生活を謳歌しているときに、私は帰省して一私企業をつまらないプロパガンダを聞いている。きっと、これは真面目に単位を取らなかつた私への罰なんだろうな。こんなことになるなら、ちゃんと単位を取っておけばよかった。

「我々の施設は、現地住民の方の雇用も創出しておりま

して、地域への貢献も出来ているものと信じておりますので……」

「いまいち要領を得ない日本語と共に、「施設内で活躍するクルーたち」というキャプションのついた写真が映し出される。写真に映し出されるのは、張り付いた笑顔で接客するクルーたちの日常だ。

普段なら良くて流し見するような退屈な写真たち。その一つに、私は釘付けになった。■だ。生気が耳から抜けきったような顔に騙されそうになったけれど、間違いない。

あの日、あの土手で別れてから、連絡が取れなかった。どこに行ったのか、なにをしているのか。その手掛かりすら、どうあがいても掴めなかった。もう、忘れようと思っていたのに、まさかこんな場所で出会えるなんて。

「写真を撮ってくださいるほど、熱心に聞いてくださり、嬉しいかぎりでございます……」

そんな社交辞令を言う余裕があるなら、早く話を終わらせてほしい。私の願いもかなわず、講義が終わったのは、終了予定を一時間ほど過ぎた頃だった。

「お母さん

の作るお菓子のレシピが気に入りました。ありがとうございます。お母さんのレシピが大好きです。

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お弟さん、お妹さん、お友達さん、お仲の良いみんなに、お母さんのレシピを教わってほしいです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お弟さん、お妹さん、お友達さん、お仲の良いみんなに、お母さんのレシピを教わってほしいです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。

*

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お弟さん、お妹さん、お友達さん、お仲の良いみんなに、お母さんのレシピを教わってほしいです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。

「お母さん

の作るお菓子のレシピが気に入りました。ありがとうございます。お母さんのレシピが大好きです。

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お弟さん、お妹さん、お友達さん、お仲の良いみんなに、お母さんのレシピを教わってほしいです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お弟さん、お妹さん、お友達さん、お仲の良いみんなに、お母さんのレシピを教わってほしいです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。お母さんのレシピが大好きです。

*

または、<https://forms.gle/d8zfmGApGj9JzGXA>



ここから「flowline flower」の感想をお聞かせください！

■が見つめる先には、施設の光で白みがかった空が広がっている。

「あの辺りに……もう見えなくなっちゃったから、名前は思い出せないけれど。楽しかった」

「なら、どうして別れようって、言ったのよ」

絶対に言わないでおこうと決めていた言葉が口からこぼれ出る。これもきつと、私への罰なのだろう。楽をしようとした私への罰なのだ。

「私を攫って欲しい……キミがいる、もっと明るいところに、さ」

「どうして……」

「星座を失くしてしまったから。だから、攫って……ほしい、の」

そういえば、別れる時も強引だった。夜空も、この町も、そして■も変わってしまったけれど、そこだけはあの頃と変わっていない。そして、私とその強引さに流されるのも、あの頃と同じだ。

もしかすると、この土手に泳ぐ魚だけは、変わらないのかもしれない。これまでも、そしてこれからも。

「私がつつと愛するから大丈夫」そう言ったけれど、きつと彼女の求める愛は私の抱くものとは違うのだろう。永遠の愛が欲しいと言う彼女はしかし、止まり木を探しているだけなのだ。だが、欲しいというのなら解けなくなるくらいに、溺れるくらいに与えるだけだ。元気になれば彼女は当たり前前の幸せに飛び立ってしまうから。

そして「その手を何時振り払ったら一番彼女が傷付くだろうか」そんなことを考えている。通学時に駅のホームに迫る電車と線路の隙間にふと吸い込まれそうになるように。

或いは——そう、或いは最期までこの気持ちを抱きながら側にいることこそが、最大の裏切りになるのかもしれない。

「顔、拭けたよ」

そうして私は、普段通りに彼女に並ぶ。

登場人物紹介

赤身ー肉

青菜ー野菜

教授ー教授

私は肉でできている。毎朝目覚めるたびに、私は重力が肉を歪めるのを感じる。

ベッドから起き上がり、目脂で汚れた眼で辺りを見渡す。携帯電話に入っていた新しい通知は、パプリカ味の豚の栽培に成功したというニュースだった。

半世紀前に疫病が地表から植物を一掃して以来、私の住む内陸では、庶民の食事のほとんどが肉類でまかなわれていた。光合成するものがいなくなったことによる二酸化炭素濃度の上昇による悪天候と慢性的な倦怠感が、どの街をも蝕んでいた。

今朝の食事は鶏もも肉と牛乳だった。肉は消毒されているので、生のままで。昔と違って、肉を加熱して食べる人はいない。残り少ないエネルギーの無駄遣いだし、水溶性ビタミンの欠乏は生命に関わるからだ。

人類が野菜を食べていた時代について、老人たちが寂しそうに述懐するのを、私は幾度となく聞いてきた。でも、野菜どころか植物を見たことのない私には、それは実感のない昔話でしかなかった。

今日は月曜日だ。大学生の私は、動物の遺伝子を組み

と、大丈夫」

*

二人で遊んでいたゲームで、モンスターの体力がギリギリになって峙^{ねぐら}へ帰ろうとする場面を思い出した。ここだ。「ねえ、何があったの？」

流花の瞳が一気に涙を溜めた。そして、決壊する。

「パパは！ 愛する努力じゃ足りなかったみたいだっ！」
言っている内容は支離滅裂で、急に聞かされても訳が分からない筈だ。だから、そんな表情を作りながら、これまでにない程弱りきった彼女の姿は——そう、そそる。そんなことを心の裡^{うち}で周は感じていた。突然の事態に傷付いて、当たり散らして。実に真っ当な反応だ。

「私は！ パパとママが愛しあって！ それで生まれてきたんじゃないの？」

流花の叫びはその剣幕と裏腹に小さなもので。揺らいでいるのだろう。急に父と母が他人になるなんて。二人の愛の証が自分である筈。じゃあ、その愛がなくなったら？　なんて酷い父親だろう。娘の存在理由^{そんざいりゆう}をこんなにボロボロにしてしまうなんて。やっぱり引き離して正解だった。

「私が流花を愛しているから、大丈夫だよ。ずっとずっと

高校生活も半ばを過ぎ。周は行動に移ることにした。アレはどうせ定刻にこの場所を通るだろう。通勤の電車で事故があったとしても、途中で通り魔に刺されようともこの道は同じ時刻に通るのだ。悍^{おぞま}しい。

そして、次郎太が周のいる道へさしかかった。

「あれ？ 荘野さんだよ。どうしたんだい」

「実は、流花さんのお父さんにお話ししたいことがありますまして」

「僕に？ 流花のことかい？」

「いえ、次郎太さんのことです」

思い当たる節が無いといった顔の次郎太を歩いて数分の公園へ促す。流花の家はずっとこの辺りにある筈なので、この公園もかつての遊び場だったのかもしれない。そう思うと胸の裡^{うち}の昏い炎が勢いを増した気がした。

「それで、僕のことって？」

世の人類、お前を事件のテーマにしよう。お前が。

「お前が……」
「お前が……」

*

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

*

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

*

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

るところになったのは、それから二週間後のことだった。著者は逮捕され、供述を残している。

「私は今でも、自分のしたことを誇りに思っている。ほうれん草の生産体制が整えば、世界中の食卓に、かつての彩りが蘇る」

「人間を人工的に生み出したり、その遺伝子を操作したりすることを、生まれてくる子供への虐待だとか、人権侵害だとかいう人がいる。しかし、普通のやり方で親が子を持つことと何が違うのか？ 私は私の子供たちを並の親以上に愛している。その理由は苦勞して生み出したからではなく、私の子供だからに他ならない」

実際、その子供たちは、体の表面がほうれん草である以外は、通常の人間と変わりがなかった。ほうれん草は毎日、羊の毛のように収穫することができた。

*

それから二年がたち、私は大学院生になっていた。ほうれん草のことなど、もうすっかり忘れていたのだ。

青菜あおなが入ってくるまでは。

*

莊野周は真っ当なものが好きだ。上位に入るであろう大学院卒の父と、専門学校卒の母を持ち、大型の休みになると孫の成長を楽しみにする両親父母の元へ遊びに行き、勉強は国語と英語と生物が得意で数学はケアレミスが目立つが嫌いではない。そんな環境で育って真っ当なものが好きな人間に育った。

では莊野周は真っ当だろうか？ ——否である。真っ当な人間というのは当たり前のもが当たり前好きだから真っ当なのだ。真っ当だから好きなど、マジョリテイの志向では有り得ない。

流花との出会いは私立中学校の一年次の入学式だ。同じクラス、隣の席での入学式。実のところ、そのときは彼女のことをそんなに意識してはいなかった。中学校に通う生徒など、皆ある程度は真っ当だったから、木を見ることなく森を見て満足していた。

それが変わったのは初の授業参観のとき。自分の子供を覗にきた父兄の割合としては母親が多かったが、父親の姿も無い訳でもない。周の家も来たのは父親だった。そ

*

青菜も大学院生だった。引越しが遅れたとかで、五月になってからやっと研究室にやってきたのだ。わざわざ遠方からうちの大学まで来るだけあって、他の学生よりも研究熱心で、教授ともすぐに打ち解けたようだった。

私は比較的研究室に長居するタイプなので、青菜と他愛のない世間話をする機会は多かった。それでも、秘密を打ち明けられるほどの信頼を得ているつもりはなかったのだ。

「一緒にトイレ行かない？ ……赤身さんには、話しておきたいと思ってたから」

「ん？ ああ、トイレね、行く行く」

不思議な誘いだったが、机から動きたくない一心で尿意を我慢しながらモニタをぼーっと眺めていた私は、すくと立ち上がり、言われるがままについていった。

「私、実はサイボーグなんだ」

「へ？」

「見て」

青菜はおもむろにシャツをまくり上げ、腹部を見せた。

の日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが、その日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが。

授業の始まる直前、クラスメイトの会話として、そのときには前後の席になっていた流花に互いの親はどれなのかと話しかけると、彼女が後ろに手を振り、中肉中背で穏かな目をした次郎太がそれに応えた。

——アレは何だ？ 流花の向く先を認識した瞬間、周の世界は、暫し停止した。周はごく真っ当な家庭に生まれ、真っ当な社会で生きてきた。彼女自身が周囲とどこか違うことはこの頃自覚し始めていたが、それでも周囲にあるんなモノはこれまでいなかった。

次いで流花が周の親を尋ねていたが、周は生返事しかできなかった。

最初の授業は国語、宮沢賢治「雨ニモマケズ」。「サウイフモノ」が、いた。

とはいえ、別に異常者性愛に目覚めたというのでもない。彼女の興味はここで流花へと移った。木偶からこんなに真っ当なものが生まれたのか、育ったのか。「代数で

のは母の実家以来だった。

青菜は慣れた様子でほうれん草を根本からちぎり取り、水道の水でさっと洗った。鍋に昆布と豚バラ肉、そしてほうれん草を放り込み、水を加えて塩を振った。

「常夜鍋ってね、毎晩食べても飽きないから、常夜鍋っていうんだって。本当はお酒を使うらしいけど……」

米を発酵させてつくる酒は、それはそれは美味しいものだったと、祖父もよく言っていたものだ。

電磁調理器の電源を入れた。ジーとやかましい音がする。

「ありがとうね、今日、来てくれて」

「いやいや。こちらこそ、どうも」

「ずっと誰かに言いたかったんだけど、信頼できる人がなかなかなくてさ」

「……そんなに信頼して大丈夫なの、私のこと……」

「うん……いや、信頼っていうか、純粹に赤身さんと仲良くなりたかったっていうか」

青菜の行動のリスクから判断するに、社交辞令ではないようだった。これはずいぶんと好意を持たれているのではないか。

「たはは……それはありがたい」

そうこうしているうちに、鍋が沸騰した。

「じゃあ、いただきますよるか」

青菜は皿に薄めた水酢酸を注いだ。

具を箸でつまみ、酢酸に浸してから口に運ぶ。私も青菜に倣った。

一口目に感じたのは、初めて経験する風味だった。酸味と肉の旨味が、後から追ってくる。

「これ、おいしいね」

「でしょ。よかった、自分以外にもおいしいと思ってもらえて」

「うん、本当においしい。……また頂きに来てもいい？」

青菜はとても嬉しそうな顔をして、

「もちろん！ 毎日でも来て！」

外へ出ると、もうすっかり夜だった。今まで退屈だった夜空が、今夜は少しコントラストを増していた。

それから、数日に一回青菜の家で夕食をとるようになった。古い資料にある様々なレシピを試した。

調理をし、食べることは、こんなに楽しかったのか。人

し理解されたくないのだ。人のことは言えないが。

「だって、私を待ってくれたワケじゃないでしょ。じゃあどうでもいい」

それに——まあ、なんだ。拗ねるのは彼女の専売特許ではないのである。

*

「どうでもいい」——そう言われて、血管の耐える圧を超えていきそうなほど強く頭へ血が昇るのを感じた流花は、周へ向けて開きかけた口を、しかし噤んだ。彼女を不機嫌に、そして十数年来馴染んだ家を他人の家のように変えたやり取りを思い出したからだ。

流花の家庭は数日前急変した。それまでは何かが変わる、終わる、そんな影さえなかったのに。

「うん、帰る」

震えそうになる声色を抑えつけながら、なんとかかそう言った。

*

父次郎太は娘の流花からみても「人ができている」と思う。怒声を聞いたのは幼い頃母がいない隙に流花が台所から包丁を持ち出してお飯事に使おうとしたときくらいで、その時でさえ怒鳴った後に一度流花に謝ってから説教を始めたのである。自宅の洗濯機や食洗機が一段グレードの高いものであるのに気付いたのは幾度か友達の家遊びに行ってからであるが、流花が生まれた頃で父が強く意見を通して購入したらしい。家事も積極的に行う、行事や行楽にはきっちり仕事を休むといったことが決して世間の当たり前でないことを、流花は中学校あたりまで知らなかった。

母咲恵は、その性質を近しいもので表すのなら「気分屋」だ。「今日は天気が良いから散歩に行こう」と言う日もあれば、別の日には「今日は天気が良いから家でゲームしようか」などと言いい人を混乱させることも珍しくない。父曰く、「基準は完璧に一貫している」とのことらしいので、表にそれが出てこないだけなのかもしれないが。そんな父と母の間柄について、流花は「母がその気になったときに父にアタックしたのだろう」と思っていた。

私の知らないところで
幸せになって。
だって貴方に不幸で
いてほしい。

日溜。 (@hid_alma1026)

早川一 (@vagiinaeye)

イカロス

【まんてんの虚無】

あの娘ひとりで泣いている まんてんの虚無降り注ぐ音

【切れはし】

いろんなことを口にするのをためらうようになってしまった
こんなおとなになりたかったわけじゃないのに

『ようじょの手記』より

【from me 2 n】

Iuv

【ススめ】

もう手に入らないのだと諦めることが必要なのです。悲しむことを恐れることはない。悲しむことは前へと進むために必要な一つの手順にすぎないのだから。

【海山】

これは個人的な感覚である。

海に行くと、そこでは私は独りっきりで放り出されてしまったような寂しさを抱く。しかし、山に行くと、何ものかに深く包み込まれているような安堵に包まれる。

【世のしんり】

なにものかを手に入れることができるかのように錯覚していたから、手に入れることができないと気づいたときに（手に入れることができなかったときに）落ち込むのかもしれないが、そもそも手に入れることなどできないのだからそんなことで落ち込むのは時間の無駄である、とアナタは言った。

【イカロス】

金平糖に手を伸ばす。掴み、手を開くと崩れた灰があるのみ。大玉を頬張れど苦く、涙の一粒。近寄ればよく見える。盲には関わりなし。